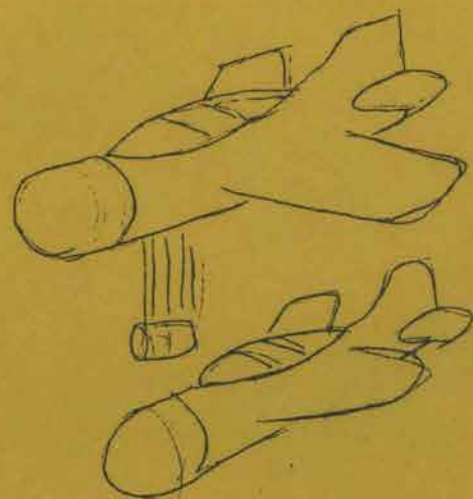


父・母・祖母の語る

第二次世界

大戦



滝合小学校
6年1組

52.2.25 発行

977

絵 西田和人

最年少の海軍志願兵（父）

第二次世界大戦がはじま、たこの父は、小学校五年生でした。

そしてわすか十四で昭和二十年四月二十六日に志願兵として海軍へ行、たそうです。そこは、山口県の前府海軍通信学校だったそうです。父がはいったころは、沖縄戦争の真最中でした。

海軍にはいつからいろいろなくんれんをうけました。規則を守りなかつたりすると、バット（かしの木）とガストッパーなどぶたかかれたそうです。一緒にいる人も、年の若い人達が多くみんなホームシックにかかっていたそうです。そんな時には、夜、星をみつめながら歌を口ずさんでしのび泣きました。うです。よくうたったといえ、軍かんマーチ、海ゆがば、日本海軍レダといった。海軍にはいつか乗ることが、これは、海軍記念日においしい肉をたくさん食べさせてもらったことだそうです。小だんの食事は、大の肉や麦めい、で本当にまずかったといっていました。夜寝る時は、小こんではなくてみんなハンモックでした。

昭和二十年六月二十日

ドイツが戦争にまけたのをキカイに父達は、横須賀に帰ってきたそうです。やいてキを殺すためにあなを一生けんめい掘っていました。キにみつからないようにして、ロケット砲をうつためたそうです。

海軍の中では、このことばはつけつけないそうです。朝はラッパの音とびおきました。お風呂などには、あまりはいりなかり、たので不潔の状態からくる、なんきん虫やいらみなどがたがって困ったそうです。

昭和二十年八月十五日

父は、八月の三十日ごろ横須賀から田舎へ帰りました。それから帰ってきつて夜更へ行きながら職をさがしたそうです。そしてじいちゃんにもこの生活にもどってきしました。

おわり

母が語る第二次世界大戦

昭和十六年二月八日

戦争がはじまったころ、母は新潟県長岡小学校に行、ついで六年生でした。初めの頃は、日本の海軍の人達が真珠湾攻撃をして大勝利をおさめたそうです。

戦争がはげしくなると男の人達は、みんな兵隊にとられていきまいた。

そして女の人達は、畑仕事をまかされまいた。これは、今まで男の人達が畑仕事をしていたのに兵隊にとられていったので人手がたりなくなつたからだそうです。

そのころ学校といつても、名ばかりで戦争のため満足に勉強ができなくなり、お昼のお弁当は、日の丸弁当というのをもっていかされました。日の丸弁当というのは、ごはんの中に梅干し一個をいれたものだそうです。全部、白いごはんをいれつくする人はいなくて、お米のかわりに麦をいれたりいもをこまかくきざんだものをもつていき、卵焼きなどももつていくと、みんなと同じものになさいといわれ先生にとりあげられたそうです。学校の卒業式は、なんどこでできたけれども、今のようには時間などかけずに、ただ卒業しよう書をわたしたというだけだったそうです。みんなしゃおん会などはできませんでした。

母が卒業したころから、それまでは自由にがえたお米や衣類品が少なくなり、点検制で配給になり、だんだん質も悪くなり量も少なくなつてきました。

昭和十七年

そして母は、小学校を卒業して女学校へはいったけれども、学校は出席だけで勉強もできずに生徒動員にいかされたそうです。

軍需工場では、兵隊さんの鉄砲の弾をつくったり、戦争に使う飛行機や軍かんや大砲の部品を作る仕事をさせられました。

当時の人達の服は、男女によって異なっていて、男の人はかお黄色の国産服で、女の人はもんぺという服を着せられ、むねに名札をつけさせられたという事です。そしてどこへいくにもいつもかかさず防空頭布をかぶっていました。はきものなどは、げたとかぞうりや男の人達は、綿みあげぐつにゲートルをまいていました。

昭和十八年、十九年

山本五十六大將が戦死してから、日本全体は敗戦の色が濃くなってきました。

それから毎日毎夜、空しゅうがあるのが夜などは、明りかもれではつきにやかってしまうので部屋の電灯など黒いまくをほって光がでないようにしました。

そのころ東京では、みんな一生けんめいに防空ごうを掘っていて、少しでも

も空しゅうのひがなくなると協力していました。

東京の子供達が田舎へいかいてくること、いい言葉使いをして、生意氣だ。とかいって大変いじめたそうです。母はそれを見てかわいそうだなあと思うていました。

このころになると母たちたくさん女の人は、もし日本にアメリカ人が上陸してきたり一人でも多く殺すため、毎日所やりのくんけんをしていました。終戦近くなるに苦しかった生活がもっと苦しくなっていました。

母は、かん二婦の見習い中で養成所にはいった後は、従軍かん二婦になるべくゴでいたそうです。

母のいた病院から少しはなれたところで、B29がばくだんを落としていたときには、はらばいになつてさうか？耳をふさいだけれどもこまかくがやぶれやうで、大変こわかったといっていました。

長岡の空しゅう八日一日、

私の母は、みながたけれども、母の弟の語によれば「長岡の工場へ、ちやうようにとられていて空しゅうにあい、工場にばくだんを落されて山へにげているさいちやうに、自分の前後にばくだんが落ち、生きたこち

がしなかったといっていました。

そして日本の国は、長崎と広島に原爆を落とされたのがきっかけで、米、英、ソに對して無條件降服をしました。

昭和二十年八月十五日

天皇がラジオで終戦を告げると生き残った兵隊さん達がたくさん帰っていました。

それからアメリカの兵隊たちが上陸してきて、夜おそく女や子供が歩いてると、ジープできてつれていったり、またおやったり、中には山の中へ殺された人もいたそうです。このようなことから、夜、女や子供は一人で外へ出つてはいけないというおふくが出ました。

そしてアメリカから、連合軍最高司令官のダグラスマッカーサーという人がきて、戦争をやった人だけをさいばんにかけたので、えらい人たちがたくさん死刑になりました。

当時の人たちは、食べる物も着る物もなく本当にじめな生活をさせられなかにはがしする人もいたそうです。それでもみんな歯をくいしばって、やけあこの日本の再建にせい、ばいの努力をしたそうです。おわりー

戦争の話を聞いて

父や母から語った戦争のことは、いろいろと私のプラスになった。父は軍だし、当時五年生で私とは年がちがうので気持ちの理解できないが、母は今の私と同じ年なので考えられないことはない。

私がいも、あの時代に生まれていたら、母のようにがんばる婦になる決意をしたのだろうか。

それとも、ふつうの工場で働いていたのだろうか。

実際、戦争にあったことがないのでこんな気象なことをいつているのかもいれない。

母の時代にはべつ、今の子供は辛せだなあと思う、辛せだなあと思うことのひとつは、まずテレビだ。あのころは、ほとんどの家にテレビはなかった。テレビのかわりにラジオをみんなできいたりした。けれど今は、一軒の家に一台はかならずある。それもカラーだ。それにテレビの中であつて、いるマシなども、きれいにしなくてもカラーで映っている。

もうひとつは、食べものだ。あのころは、お米が少なく米のかわりにいも

のこまかくしたのをいれた。今学校では、給食というものがでる。私は、給食がでることをたいへん幸いに思う。なぜなら、あのころのように毎日おなじ中めでないからだ。でもみんなて同じ日の丸弁当をもつてきたら、今の給食のようになるわけだ。

もうひとつは、あそび、物の使い方だ。あのころのあそびは、けん玉や竹馬など自分で作ってあそんだけれど、今はそのおもちゃがちゃんとお店でうらわれている。自分で作る楽しさがあつて、あそびが進歩するのではないかとと思う。このあそびについての意見は、今の子供のマイナスポイントでもあるようにかんじられる。だから私も父や母にいろいろなあそびをならつて、いつの時代にも忘れられないようにしていきたいと思う。

今度は物の使い方だ。母たちにきくと、むかしは、えんぴつをナイフでけずったんだよ。それにくりべつ今は、えんぴつけずりなんつあるんだからといった。私は、えんぴつけずりを用いてるせいかな、ナイフでえんぴつをけずるのは下キだ。えんぴつけずりはたしかに早く正しいけれども、その反対にはとんだけずりをつけてしまうのだから、と憂ふ気もする。そして私をみていつも、えんぴつをもつと大切にしようと思う。もうちょっとかけるのにす

てしまつた。たいしてもったいないからだ。

これらのことをもとにして私もずいぶん反省すべき点がたくさんあることに気付いた。だから食べものをまっにしてたり、物をむだにしたりするのはやめようと思った。――おわり――

両親の戦争体験

父は、そのころ仙台に住んでいました。そして七月二十日の夜、仙台大空しゅつに出あいました。

その前日、アメリカの飛行機がビラをまきに来て、そのビラには「あした仙台に爆弾をおとすから、逃げるように」と書いてあったそうです。でもたいていの人は、アメリカの言うことなんか信じないで、仙台にのこっていました。

次の日の夜、本当にB29がへんたいを組んでやってきました。まずはじめに、照明弾をバラバラおとしたそうです。照明弾のせいであたりは昼のように明るくなり、何もかも見えてしまうので向うはここと鬼うところに焼い弾をバラバラ落としていくのだそうです。

父は小学校の三年生だったそうです。旧制第二高等学校の近くに住んでいました。そのころ食料難だったので、学校の校庭は畑にしまっ、て豆とか芋とかをいっぱい作っていたそうです。仙台大空しゅつの日には、みんなが仙台二高の校庭に逃げて、その豆畑のうねの間にふと人をしいてねたのだそ

うです。

石巻に高射砲があつて、B29のへんたいをめぐけてその高射砲をバンバン射ちあげたそうです。でもそのたまがさくれつする位置よりB29は、はるか高い所を飛んでいるのでたまはばんばんあたりません。B29は高射砲の上をゆうゆうと飛んできたのだそうです。

その仙台大空しゅうがあつてからすぐとて、もう仙台市内には、いられないうことと、祖母父の母と父とおじたち父の弟は、岩手県の二戸というところへそかいをしました。そこで三ヶ月ほどくらして、終戦後二ヶ月ほどたつてから、仙台へ帰つてきたのだそうです。次は母の話です。

母は、戦争がはげしくなつたころ、すぐ疎かいてしまつたので空しゅうなどの体験はしていません。そかいといつても学童そかいではなく、えんこそかいなので、そかい先での食料不足とかの不業なめには、あわなかつたので、戦争の苦しさとか、悲しさとかはあまり味あわなかつたといふことです。

母は小学校四年生の時、一人だけで茨城県の親せきのおじさんの家へそかいしました。母のそかいしたいなかは、茨城県でもわりと東京に近いところ

なので、東京大空しゅうの日には、やはり東京の方向の空がま、赤に燃えているのが見えたそうです。その夜近所の人たちと、利根川の支流の、魁怒川きどがわの土手にのぼつてボーッと赤く見える空を見ながら大人たちが東京に住んでいる親せきの事などを気づかうのをだまて聞いていたそうです。自分一人だけで、そかいしていたのだから、東京の焼けるのを見ていろいろ考えた事もあったのだらうと思つて、「そのとき何考えてた？」と聞いてみました。ところが、どういうわけかそのとき何を思つていたか、まったく記憶にないそうです。

そかい生活は、結構楽しかつたそうです。親せきの家が農家だつたので、田植えの手伝いや、畑仕事の手伝いをしてたそうです。おかいこさんもかつていたので、その時期になると、くわつみや、くわにつく虫をとったり、それから、いなごとりや、むぎふみなどもやつたそうです。脱殻もしたそうです。そのころは現在のような機械ではなく、手でいねをもち、足で機械をふんで脱殻するのだそうです。まだ小学生だつたので、そんな上手にはできなかったけれどたいいのことはやつたそうです。農繁期になると、人手のたいない家では、小学生の子供にまで学校をやすませて、家の手伝いをさせたそう

です。母は農繁期に大ぜいの友だちが先生にそうこわって、学校を休むのをともうらやましく思っただそうです。なぜかというところ男はたいてい戦争にかり出され、小学生でも高学年になると、貴重な労働力として、ちやうほうがられ、家のてつだいなどを、いっしょうけんめいするものの方が勉強なんかしているものよりもえらいんだというような考え方が多かったからだそうです。

学校での生活でいちばん印象にのこっているのは、便所そうじだそうです。地区別に班をつくって、毎朝登校したのだそうですが、その班ごとにわかれて毎朝学校内のそうじをしたのだそうです。そうじの場所は、だいたい一ヶ月ぐらいいかわったそうです。その中でも便所そうじがわすれられないそうです。今のように水洗じゃないうえに、いなかの学校なので、ゆかや、まわりが木でできていて、そのゆか板やまわりやすのこを全部ピカピカにみがくのだそうです。もちろん便器もピカピカにしないではいけないのだそうです。「兵隊さんが、戦地でがんばっているのだから、私たち銃後の人間は一生懸命そうじをがんばらなくちゃ申しわけない」と毎朝最年長の班長さんが、トイレの前にせいれつした班員に注意の言葉を述べたあと、「かかれっ」とい

うごうれいで、いっせいに始めるのだそうです。「イチ、ニ、イチ、ニ」とかけ声をかけながら、ゆかをみかき、寒い冬でも汗が出るほどみがいたのだそうです。だいたい一人一個か二個のトイレをうけもったのですがそれはもう、それこそほんとうにきれいにしないと合格にならないので、勉強よりそれが一番たいへんだ、たということです。

やがて終戦になり、半年以上たって、東京の生活もややおちついてから、母は東京へ帰ってきたのだそうです。

私は、両親の話をいろいろ聞いて、二人ともけっこういろいろなことを体験しているんだなと思いました。そして三年生の時に読んだ「猫は生きていく」という本を思い出しました。あの本には、もっとすごい、おそろしい戦争の体験が書かれています。私は、うちの両親が「あんなものすごいめにあわなくて、ほんとうによかったなあ」と思いました。

母の戦争の思いで

母は、サイレンの音や、ゴォーンという音をきくと、今も戦争を
思い出すそうだと。

私の母が、四一五オの頃、ちやうど戦争が、はげしくなり、今のうちに
幼稚園や保育園など行くことすら、思いもよらなかつたそうだと。

防空ごうの中で、じつとつづくまわっていたその暗さと、地下水が頭の上
から、ポタポタ落ちてきた冷たさが、今でも目の前に浮かぶそうだと。

空しゅう警報というのも、説明してもらってよくわかつた。その空しゅう
警報の解除かいじょの知らせで、防空ごうの入り口のトタン板をあげ、母と母の父
(私の祖父)が、新宿のあたりを見たとそうだと。すると、そっちの方が、

真赤で、祖父が

「この明るさじゃ、新聞がよめるよ……」と、言ったことを、はつきり
覚えているそうだと。

おやつは、たいがいだいずをいつた物。ご飯のかわりに、おいもや
すいとしん、こうりゃんという中国の食べ物なども、食べたそうだ。食べ物
は、ほとんどはい給で、すけそうだら何ビキとか、一人少しづつにかぎ
られていたそうで、いつも、おなかがすかせていたそうだ。

母は、そのころは郊外だった下北沢に住んでいたが、いよいよあがらない
と、いうので私の祖母の、いなかの長野へそかいしたそうだ。

自分の家を建てるまで、親せきの家三々四回、ぐるぐるまわって住んで
いたそうだ。借りていた家の大家さんが、とてもいい人でよく母を、
かわいがってくれたそうだ。その大家さんのむすこさんが、夜中、ひよつ
こり満州から、帰ってきたそうだ。このことも、母は、今も覚えている。

戦争は、やっとおわり、小学校へあがった。戦争がおわった。と、いつ
ても世の中は、まだ落ちつきがなくハラハラだったそうだ。今のうちに、
教科書もよくなく、うす茶色のザラ紙であつさなどほとんどない、うすつ
ぺらい教科書で勉強していたそうだ。食べ物も、はい給。たとえば、砂糖
なら砂糖しかはい給しない。と、いうふうにかたよった物で、はい給された

そうだ。ねる時すら洋服をきたままふとんに入り、まくらもとには
防空ずきんを、おいてねたそうだ。

母の話は、きいて私たちは幸せだなあと、つくづく思った。

今なら、えんぴつだってノートだってお店へ、行けばあるけれど

戦争中や、戦後は、そんなふうにならなかつたんだと、私は思う。

食べ物も、衣服も同じことだ。わがままなど、とてもじゃないけど
できなかったと、思う。これからは、物を大切にしていって、二度と戦争など
おこしては、いけないと思つた。

母の語るおそろしい戦争

私は、母の戦争の話を何回も聞いていますが、いつも、おそろしいと思っ
ています。

母は、戦争の時、六才だったそうです。母は、はじめ山梨県、甲府市に
たてうですが、母の父の仕事の関係で東京に移りました。そのころは、まだ
戦争は、ひどくなくなかったそうです。母の父が戦争に行くことになり、また
もとの場所、山梨県、甲府市に移りました。

三年後、悲しい知らせが、母のところへ届きました。それは、母の父戦死
ころほと言う手紙が来たのです。

話を少しとぼします。戦争がひどくなってきたのは、母が女子高等二年
生の時です。母は、学徒同員で兵隊さんの食べ物かんぱんなどや衣服軍用服
などを作る工場にいました。そのころ、昼から空しゅううけいほうが鳴
りひびき、アメリカの飛行機がびらをまきます。びらに書いてあることは、
その日の時に空しゅううに來ると書いてあります。その時間のとおりに空しゅう
に來るそうです。それなのに日本のほうは、びらに毒がついている、でまだ

などうそをついていたそうです。学生同員へ行くときも、ひくびくしながら友達と、ならんで歌を歌いながら行くそうです。

歌 花もつばみの若さくら、ごし。くの命ひ、さげて、
われら、学生同員、

母がりすの時とうとう空しゅうにあ。てしはいました。もうそかいの用意までしていたのに8月6日の夜、家がまる焼にな。てしましました。そのため、少しの間、トタンで作った家にすんだそうです。夜にな。て横になま。と、トタン屋根の空から星がみえたそうです。そうして、りすの時そかいをしました。

私は、戦争。ておそろしいんだなあて一番はじめに感じました。

それから、二度と戦争なんてや。てはいけなないんだなあて思いました。

私は、き。と二人ではにげられな。ただろう。母は、よく生きてたと思ひます。ばくだんの雨が降。た。に

一度でいいから トタンの内から屋空をみたいと思います。

おそろしい 戦争

私の母は、小学校 三年生の時に戦争に 会いました。

住んでいた所は、カラフト という所です。日光が あまり 出ないで、雨や雪ばかり降。ていた所だそうです。

戦争が 始ま。た時は、母は、小学校にいて 先生が「すぐ、家へ帰りなさい」とい。たので 母は、すぐ家へ帰。たそうです。母の母つまり私の祖母がリュックの中に、赤ちゃんのおべ物や飲み物を入れて 母は、次男の子を、おんぶして、防空ごうの中で小さくなり 近くで しゃういだんがおうてその時は 十五夜のように 明る。たとい。てました。防空ごうの中で 何日も 暮。つしてはただんど、あまりにも 戦争が 激しいので 行橋に見つか。つたように 山の中 山の中とにげ回。たそうです

お中がすくと畑の野菜や草など食。りれる物なら 何でも食。べたそうです。今、私たちには、そんなことはできないと つくづく思いました。

そして、にげている間に 山の中で 機関銃や爆弾が 何回か雨のように降

ってきて、いっしょににげてた人たちが、何人か死んでいったこともあった。そうです。その時分は分わいそうに」と思っただけだといっていました。母は早く自分たちがにげたいという、いしの方が強かったみたいでした。にげてにげて、にげまわ、てやうとある大きな建物にたどりつき、ほ、としたそうです。そこは、小學校です。まわりをみた。にげてきた人がみな小學校の中に入り、日本は負けたんだよ」と母たちに教えてく水で、母たちは、始めて日本が負けたということがわかり、みんなぞすわりこみが、かりして泣いたそうです。なぜ泣いたかという、あんなに苦勞して苦勞してにけ回ったのに負けたカウそうです。気持ちがおちついてから、道の計算をしてみたり三十五厘も歩いたそうです。カウフトの鳥をソ連にとりれてしまったので船で母の母の母つまり私のおばあちゃんのいる福島へひきあげてきたそうです。

私はこういう話しを聞いて母たちの時代に生まれてこなくて
よかったですかと思いました。

父が語るおそろしい戦争

太平洋戦争の始まった、昭和十六年十二月八日。
太平洋戦争の始まった、昭和十六年十二月八日。父は当時十二才。現在の私と同じく小學校六年生だった。

そのころの父の親友は、小學校を卒業するとすぐに、陸軍士官學校へ行きました。昼間は、雑誌社の給仕をやリ夕方六時から都立工業學校に通うようになりその親友とはそれっきりで今、生きてゐるのかさえわかりません。でも父の通っていた學校は、サイレンになると帰らなければならなくて、ほとんど勉強というものは、やらなかったそうです。

そ人は學校でも、夏はともかく冬にまではたか軍事教練をやらされたといは、いっていません。

そして昭和二十年三月十日父のつとめていた会社、自宅ともまる焼けになつてしまい、近くの倉庫に家を焼かれた人か十五、六人集まり六じょう二間にぎこねをしたそうです。

次の日の朝、はいになった自分の家に行つて、まだ使えるものはないかこ

がし出し新しい生活を始めたのだそうです。それからはお米はいきゅうとか、豆腐水菜とかをもち、てくらしをつづけたと父は言います。

そして昭和二十年八月十四日ラジオをひねると「明日の正午国民のみなはラジオを聞くように」と言われたそうです。その時は、だれとして明日で戦争がおわるに予感するものもなく、まして真実を知るものは一人もいなくて、だれもがみんな「最後の一人なっても戦からんだ」と思っていた。いいえ思われていたといふことです。

八月十五日正午ラジオで戦争がおわったと言われたも、すぐ平和がもどるわけもなく、と苦しい生活をしていたと父も母も口をそろえています。戦争がおわり、てどう思ふかとはずぬると「戦争というものは、人と人が殺しあつたんだ。もう二度とあんなおそろしい戦争をしてはいけなはい」といってくれました。

私は、平和な今の時代に生まれてきてよかったと思つて半面、戦争の体験していた父が将来のためになつたのではないか。と思うのです。

父と母の戦争の思いで

さて、書きはじめるか……
母さんは、がご島の飛行場近くで、トーゼン、トバ、トリもウケた。母さんの、家の上ではくけききばくだんをおとすと、その飛行きに平行してばく弾は、ちやうと飛行場まで行きぬい中する、ときどきばく弾が、家の先の方にもおちたぞうだ、それから、飛行場の近くだから、兵たいの人たちが、よく合戦したぞうだ、土宮はちゃんとしたゴエモンブロ、二等兵や、そういう人たちは、ドレムカンブロ、たいしたちがいではないか。またかご島のさ地からのと、ころは有名だろう。

次に父さん、たんさん書けるばともをかなか、たのですし。

父さんの家の上はよく飛行きがよくとんでいた、ある日、戦とうきが低空でとんでいたのど手をふると、いきなり、バババババとうってきた。それはアメリカのせんとうさだつた。

父も母の話をきくと父や母は、あんまり、戦争のことをおぼえてないので多分が、かりした。

みんなと同じように、ばくも、戦争は反対だ。

東京大空襲

父が、はじめて空襲にあつたのは、昭和十七年四月十七日、アメリカの航空母艦ホーネットから発進した、B-26が、いまの早稲田大学のそばに三回にわたつて三回投下した。それからずっとこなくなつて、昭和十九年十一月三日に、たけど日本のひこうきがよくおちた。日本の戦闘機がよくB-29へたいあたりを、戦闘機がきてすぶが、た。昭和二十年八月六日八時十五分広島に新型バクダンを投下した昭和二十年三月十日父は、うしづめ今の新宿にいたくうしゅうになるし、新聞の字が見えるくらいあかるくなった。昭和四月のすえ横浜がくうしゅうに、なつてバクダンの音ですぶが、た。

ぼくは、この話を聞いて、こんなざんこくな戦争は二度としてはいけない、と思った。

父が語る戦争時代と食糧とようす

父が兵隊に行つたのは、昭和二十年の戦争が終つた年ぐらいたつたそうです。それまでは、工場などに働いていたりして二十才までを過ごしたそうです。そのころは、まだ米を食べられたそうですが、父に赤紙がきた時ぐらから、ふつうの人々は、すこしぐらいづつ米が食べられなくなつたそうです。それから高崎、横須賀などいろいろ転勤をして、ちやうど長崎、広島などに原爆が落とされた時ぐらに、どうとう列島にいたそうです。そのころは、食糧にがんころもちへがんそういものとかが、かんはん他がだいたいのものだったそうです。それまでは、米も食べていたそうですが、送られてくるうちに敵の飛行機などにやられて、だんだん米も少なくなつて、たそうです。そのころは、まだニコースでは日本は勝つて、いるという事はかりだ、たということです。でもそれにしては食糧はつっていくばかりだから、うすうす日本は負けてきているように思えて来たそうです。

東部ニューヨークには、星はあつく、夜はしのぎよいが夜スコールが来るに
め上陸して以来までもにぬもじりであった。

満気は、三田熱マラリア・ね、熱ねつアラリア・デングねつ・ね、たにか
いよう等の満気により次々と死者が出た。サソリのために死者も多かった。
海岸に行くところが大変で、このままでは生きていた。

このままでは生きていたところに、マーカム川という川がありそこには、ワニ
もいた。

感想

・この回もひろきひろきひろきひろきひろきひろきひろきひろきひろきひろきひろき
・死がいがゴロゴロしているのが気もわるくはとかとおもう。

おそろしい戦争

おそろしい戦争

母は、世田ヶ谷の松原で生まれました。戦争が始ま、た時は小学三年で生
た。世田ヶ谷の方はあまりひびくなくて、母の家はやけなかつたそうです。
母のきょうだいは、長男、長女（母）、次男、次女、三男、四男。家族8人で
す。そのうちのおじさん（長男）が皮ぐつをはいて、かけてたらぐつに火の
子がこんできて皮ぐつに火がついて、みんなであわてて消したそうです。
そして戦争中の食べ物、とうもろこしを粉にして、その粉でパンを作って
食べた。あんずのはいきゅう、あとはさつまいもぐらいた、たそうです。
空は、真赤になって燃えてるように見えたそうです。

それから、私がかわいそうだと思、たのは、母が近所の人たうとぼつ空（こ）に
人、ていた時に、小さい子がとつぜん「わーわー」泣くものだが、その子の親

と、泣き出してしまいました。あんまりわーわー泣くものだが、その子の親

が、と穴から出て泣きやまそうと、おんぶをしようとした時に上から、長いお皿のような物のしゅういだんがふってきて、その子の右手をばさり切ってしまいました。その子は、すぐに病院に行、たそうだけど、そのみの右手はもう帰ってこない。そう思うと、なんてひどい戦争だろうと思ひました。

父は、北海道の釧路市・鳥取町で生まれました。父のきょうだいはいは、長男、長女、次男、次女、三男、三女、四男、四女、五男、六男、七男、八男、父、九男。家族15人です。

父は、ある日空しゅうにあつて、にげまわっているうちに、ぼう空ごうを見つ、はいううとした時に、穴の中の人に「い、はいだ、ほかへ行け」と、いわれました。父は、急いで道路のはじにかくれていました。そして、もう一度さ、きのぼう空ごうにいってみたら、そこにいた人は、みんな死んでいたそうです。そのあと父は、ことわられてよか、たと言、ていました。食べる物は、豆カス、よくてかぼちゃと、じゃがいもだ、たそうです。私は父と母に、この話を聞いてなんてひどく、おそろしい戦争だろう。何万人の人が殺し、苦しんだことが、この話を聞いてよくわかりました。

「大東亜戦争」

昭和16年から昭和20年8月まで、アメリカとソビエト連邦を相手に戦った。

父は、学徒動員で軍事工場に、上陸用船ていを造りに働いていた。

りように入って生活をしていた時、横浜空しゅうを経験した。

B-29がへんたいを組んで飛んで来た。焼く爆や爆弾が落ちて、焼野原になり、子供や老人は皆田舎に避難していった。

食料は悪く、ずうすり、おれもを食べていた。

5

おかしな人は食料などおんまりなかったけど、日本の方から戦争をしかけたんだからしゅうがないと思う。

相手から戦争をしかけて来たならそれはえらいと思う。

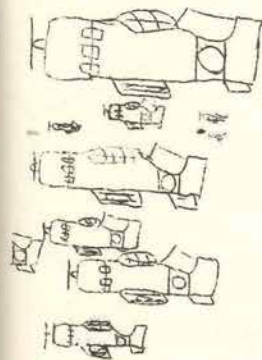
戦争中の母のいなか

毎日の母は、戦争のとき朝は、山におゆをほって行く水夜は、家で電氣もつけくらししていました。

まい日、まい日、ぼうくうずきんをひぶってひしに、にげていました。げんざいは、

戦争中は、高野原というところだ、あってほかの国だ、まい日はくだんをおとされていってまもてわかったといっています。いまは、もうよくはっています。

ーおやりー



おはあさんの語る戦争

私は、おはあさんに戦争の話をしてもらいました。

そして話のとちゅうで千人針というきいたことのないことばがでてきました。私は「千人針、てなあに」コナレ、も、とくわしくおーえとていうと、千人針と言つのは、戦争にいってたかっているとき玉があたらないうつにともっている、おまもりのようなものです。

白いさうしのきれに、千人の人に針ぬってもらって、それをもっているとき玉があたらないうつにともっている、おまもりのようなものです。

私のおじいさんも、この次は戦争にいかなくてはならなくなつた時は、おはあさんもやっぱり千人針をもっていたそうです。そして、甲府の駅で降りおりする人に「千人針おねがいます」とたのんで一日中、立ちっぱなしだ、たそうです。

でもよがったことに、私のおじいさんは戦争にいかなくてすみました。それは、つまり、おじいさんたちは、この次戦争にくくということで、この次という時には、や、と戦争が終つたからです。

初めに、書き忘れたんだけど、戦争が始まったとき、おばあさんたちは、全々しらなが、たそうです。そして東京の空がまっ赤に升えたそうです。でも戦争が終わってからも、生活は苦しかったそうです。おばあさんの家では、東京で家が焼けちゃったりしてしんるいの人や20人もきて、20人の人が一つの家でくらしただけです。でも20人の人がいっしょにくらすと、食事なんか、戦争が終わったばかりで、少ないのに20人もいると一人分が、すごく少なかったんだろう。

最後に、戦争は終ってよかった。戦争なんてなければよかった。戦争にいて、戦死した人は、かわいそうだ。そしてその家族の人も、それと、私はそのころ生まれてなくてよかった。それと、もう戦争は、おこらないと思うけれど、もしも、でもぜったいにおこらないでほしいと思います。

母の語る戦争

お母さんは、すみ田区に住んでいました。

昭和二十年三月十日の大空襲の時の時、お母さんは、小学校一年生で、お姉さんが、女学校一年生で妹が、四才でした。

戦争が、始まってから、お母さんの家では、いつもリュックサックに、本やノートを入れて、くつを、そえて、まくらもとに、おいておいたそうです。そして三月十日の夜中に、ばくだんが、おちたそうです。お母さんの家には、家の中にも、防空ごうが、あり、家の出た所にも、あったそうです。そうして、そのばくだんが、おちた時、用意が、してあったので、すぐにやられたそうです。でも、その、防空ごうでは、まにあわないので、公園などに、にげたそうです。でも、その公園でも、まにあわないので、近くの小学校が、やけなかったのので、その小学校に、にげたそうです。そして、ほ

かの人もその学校へ、にけたそうです。でもそこにばかりいると、あぶない
ので、親ゼキの家（王子）に、そかいしたそうです。でも、そこは、せまいの
で、ほかの家を見つけて、とまらして、もらったそうです。そかいする前、
妹は、けむりに、まけて、死にそうになり、防犯用水の底の水を、のんだら、
生きかえったそうです。

戦後、お母さんたちは、食べる物がなく、草や、おいもなどを、たべてい
たそうです。それでも、食べ物のか、たりないので、着物とお米を、とりかえ
たりして、たけのこ生活を、していたそうです。だからお母さんは、父の子は
何でも好きで、物を、食べられて、しあわせだ。そして、この、しあわせの時
代を、いつまでも、いつまでも、続いてほしいと言っています。私も、お母さ
んの思っているように、この、しあわせな時代を、いつまでも、続いてほしいと思
っています。

「戦争に ついて」が 語る

私の母は、戦争について、こんなことを 話してくれました。

「戦争中は、食べ物をみな きょうしつと言って、米などを 取られて
しまひ、麦のごはんや さつまいものぬったもの、ごつ草、山にはえている
食べれる 実や草などを 食べていたんだよ」と 言いました。肉や魚な
どは、お正月ぐらいにしか 食べることが、できなかつたそうです。また
祖母は、「子供たちの 食べ物を とられて、たまるかゝと思つて、お米な
どを、少し、ゆか下にかくしたりしたことあつたぞ」と言っていました。

おじいさんは、理府の工場に、働きに行かされた。学校では、毎日の、み
うに、ぼうくうえんしゅうを、したりしたそうです。母や祖母の家は、町や
都市と、いうほどの、ところでは、なかつたので、それほど、空しゅうなど
は、おちたりしなかつたけれども、お米などを、取られていく、くやしさを、
空しゅうと、かゆりは、なかつた。と、言つて、いました。

私は、戦争と、言うものが、どんなに、おそろしいものかという、ことを

つくづく考えなおしました。そして「どうして戦争なんか するのだろう。おたがいに 人間どうしが どうして こんなことを しなくてはいけないのだろう。きうんと話し合えば やかりあえることなのに……」
私は 母や祖母たちの 話を聞いて「今の私たちは ぜいたくだなア。」と思いました。今の時代は、お金さえあれば おいしいものも ほしいものも なんだって手に 入るのですから…… 私はず私たちは 戦争中に 生れて なくて ほんとうに よかった。と思ひました。そして 戦争中の 不幸な 兵いけんに あつた人々を もう一度 生れかえらせて かせらせて あげたい気持ちに なりました。

父の語る戦争

ぼくの父の家は、千葉の内陸方面です。

開戦は父が七つのおきだ。たので父ははじめから国民学校に通いました。食料がなくて、さつまいものつるもたべたという話がありますが、父の家は農家だったので食べるものにはあまりこまらなかつたそうです。

また、父の家のあたりはB21が、東京をばくげきしてかきえりに運るみちだったので、上空では、よく空中戦が行なわれていたそうです。

父も、特こうたいにはいりたいと思つていたそうですが、さいわいその前に終戦になってしまいました。

最後に父は「あのころはみんな、戦争をわるいことだと思つていなかった。」といっていました。

ぼくは父の話をききたがら、今度戦争がおこつたら、そのときは原爆などがたくさんつかわれるだろうから、前の戦争で、たくさんの方があじわつた苦勞を、もつとあじわうか、その時間もなく、みんな死んでしまうか、どつちかだろうと思ひました。

いくら、おじいさん、自分の家から、どいてくれと、言ったそうだが
みんな、任せて置くのはいいので、どいてくれなかったそうです。
しょうがなくなってきた、いながらしばらく、くらすことになったそうです。

感想

戦争は、二匹から、ずうっと、やうな序はいいと思えます。

母が語る戦争の話

母の本さしころに戦争があった。

母の田舎は、余りやらねなかつた。でも畑で仕事をしていた人がいた。
空しゅう警報が出て、行機が来ると、山へにげて行つては、仕事をやっ
ていた人が爆弾が落ちてきて死んだ。

爆弾が落ちてきた時は、白い煙が吹き上げ見えなくなつた。

感想

仕事をやっていた人は、仕事が好きだ、たと思う。

田舎は、余り戦争でやられなかった。だから東京よりよかつたんじやなか
う、たと思う。

父母のかたる戦争

ぼくのうちは、父のほうで戦争にくわしいので父に聞きました。父が小学一年の時に、第二次世界大戦、東亜戦争が始まった。

最初のうちは、日本勝つていたが、戦争が始まって三年位たった、日本がだんだん敗け始めた頃、今の日野台(勿广)に、高射砲陣地があった。太平洋方面から富士山を目標に、29爆撃機が東京めざして飛んで来て、日野上空に来た時、高射砲を撃つ、だが飛行機の高さが高いため、万二千メートル、弾が途中で爆発してしまふ。弾丸の破片が落ちてきたそうです。時には空襲警報中家の中から外を見ていると近くの駅を撃った時あまり大きな音なので、びっくりしたそうです。

S.20年戦争が終つて8月15日、アメリカ軍の物資がたくさんあるのに、おどろいたそうです。それは、いろいろな種類の飛行機がたくさん飛んで来たからだそうです。

感想

もうこんな戦争がまきだし、いつべんに、日本を人かなくなつてしまふ。

母の語る戦争

そのころ母は、小学四年生ぐらいだったそうです。私はそれなりそれほど覚えていないのではないかと思つたのですが、母は一部しじゅう覚えていたのです。

母が語るには、まず、それがいいのことよりも、とつせんあつた空しゅうの事でした。ぜんぶ書くとは長くなるので、主な所だけを書きました。

その時、母は妹と二人つれて、駅へ、汽車のきっぷを買いにいったそうです。ところがちやうどその時、空しゅう警報がなつたそうです。しかし、何十人かの人をのぞいてはみなその場から動かなかつたそうです。母はその時、防空こうの中に入つたそうです。この話を聞いていると、なぜにびない人がいるのか少しギョもしれませんが、当時は、けいけい警報がなつた後に、空しゅう警報が鳴るのがあつたので、けいけい警報の鳴らない今の事を、きりインキだと思つてしまつた人がいたんだそうです。

けれど、事實は甘くなく、敵の飛行機が飛んで来て、次々に、鉄ぼうで、う

ち殺されてしまったのです。

「この時の母の気持ちには、言うまでもないと思います。」

もう一つ母は、おそろしい事に出会ったそうです。

学校から帰ると中だつたそうです。母は、ふと空をみたそうです。すると、空には飛行機（敵国の）が飛んでいたそうです。母は「うい、近くのみぞに入つたようです。敵国は一人でも多く日本人を殺そう、して、るのだから見つかつたら一たまりもありません。母はじつとしてできるだけ縮こまっていたそうです。母は、この時願うような気持ちだつたのではないかと私は思ふのです。母はその後、無事その場からはなれることができたそうです。この時私は、「一人一人の毎日はいつもこんなだつたのかとおどろきました。母の話。その主な事は、この二つでした。それよりもずっと心に残っていたのだから、そのおそろしさは想像を絶するものと思います。母が幼いころのことをよく覚えてゐるわけは、ここにありました。母はとてうまく語ってくれたのですが、うまく文に表せられないことが残念です。私の感想はただ一つで、もうこんなあやまちは二度とくりかえしてほしくない」と言うことです。

戦争

——母からの話——

戦争は、父が小学生のころだつた。

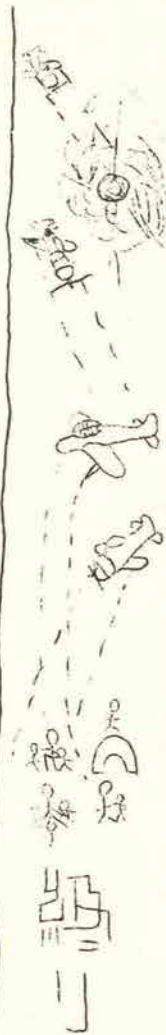
父は、団隊をかいでいなかに行くことになつた。父の母は、父の弟（武夫）と、妹（正子）の、手をひいて、二子（ヤエ子）と（フミ子）を、おなかの中に入れていた。しかし、うんがあわよく安らうにあらう。にげきせず、とうとう「死んでもいい」と、いつてその場にすわりこんでしまった。

それを見た近所（近所）の人が、「それでは、いけない」と、いつて「うんが」をうらに連れていった。父の母は、父と別れたのが最後だと思つて、なみだが止まらなかつたそうです。

そのころ父は、電車に乗れたといつて、そんなことは、考えず車内でふざけていた。そのころは、わ、たに電車にのれなかつたからよけいにふざけたそうだ。

むこうについて、お友だちがゐるのでそんなことには、気をひけず、あそんでいたという。

ぼくは、なぜこんなに泊まるのかと考えなかったのか。そしてこんな時に父や母のことをどうして、思い出せなかったのかと思つた。



「母の語る戦争」

これは母に聞いた話です。

当時母は、小学校に上ったばかりでした。母の通っていた学校は、母が一回通っただけで、次の日には焼けてしまつた、ということなのです。

そして、ある時は、ぼうさいがまんをかがって、げんきはいてねたそうです。しかも、はいているけたには、ひもでぐるぐるまきにして、いつでもにげられるようにしていたとゆうことです。

空襲警報のサイレンが鳴りだした。一家でぼうくうこうにむかって歩きはじめました。

先頭に、祖父と母が歩いて、すこし後に、祖母や、おじさんなどが歩いていました。

すると、前方に飛行機が二機こちらにむか、てきました。祖父と母は、味方の飛行機だと思つてそのまゝ歩いていましたが、後方に歩いていておじさんたちは、敵の飛行機だとわかつたので岩かげにかくれまし

た。

しかし、祖父と母はまださががさが、そのまま歩いていました。すると、敵機B-29が機関銃を放ちながら近づいてきました。

おどろいたのは、祖父と母。味方の飛行機だと思っ、て安心していたからほんめいににげました。いよいよタマは当らねにすみました。

そのB-29は近くにあり、た兵舎に打ちおとされたそうです。

それから数分ちいてはうかうこうにつきました。

しかしはうかうこうがい、ばいだ、たので、全員は入れませんでした。入ったのは幼い母と、おばさんと、おじさんでした。

そこしすると敵機がきて、爆弾を落としました。

はうかうこうの中は火事にな、たのでみんな外ににげました。

しかし幼い母たちは、にげるのがおそくなってしまいました。

母はおばさんといっしょにいたので、おばさんにひきずられて外に出ました。さういらい、母はおでこに軽いやけどですみました。おばさんも手に軽いやけどです。またおじさんといっしょにはおじさんが右足のひやから足首まですいやけどをしてしまいました。今は戦争がなぬから良いけど、もし、今戦争がなぬと

第一集 世界大戦

(山形) 昭和四年

みんなは爆弾で家を焼かれたり食物もなく、つらい思いをしたとよく聞きます。うちのおおあさんたちは、山形の、田舎にいたので、

そうゆう経験が、ありませんでした。

反対に、都会の子どもたちが、そ間にきて、おきや、集会所に

生先と、生徒が、親もとから、はなれて、そ間にきていた。

そこにおおあさんたち、よく、食物をも、て遊びにいきました。

時には、敵、おどろ、げその、けいこをして、おたがいに見せ合いました。

山形の神町のやうと、ころに飛行機がありました。

そこは、アメリカの飛行機がきて、機関銃をうつつとこを、

やねの上にあがるとみえたそうです。

ママのすんでいるところには、はなびは、おろしんをたけれども、

くうしゅうけいぼうがなるこはうかうこうには、たそうです。

たべものは、たべられないとゆうことはなく、さう、しお、しゅうゆ、

たばこ、ななは、はのきゅうにな、たそうです。

おはんに、むぎをいれて、むぎごはんも、たべたそうです。

さかなは、一週間に、一ぺん、ぐらいで、食べたそうです。
やさい、米、は自分の家をつく、て食べたそうです。
たべられる草はたべたそうです。

父が語る戦争

第二次世界大戦が始まった時、私の父は已ましたそうです。ちょうど今の私にちぐらいます。そのころは新聞やラジオが充ちていなかった。たので、電信柱には、てある号外を見て知ったのですが、それを見たとき父は、父や母に合えなくなる、と思、たそうです。と言うのはそのとき父の父は、カナダにいてカナダはてき国だ、たからです。父は日本人ですがカナダで生まれたので家もカナダにありました。大學生の時に、弟と二人だけで日本に來たのです。もし私が、両親とはなれてその上、戦争が始まったら、さびしいし、心配でいてまた、て、いられないと思います。

戦争が始まって最初の二年は、ふつうの中学生としてくらしていたそうです。三、四年月ごうから日本甲のほとんどの中学生は、工場で働くようになり、父も、名古屋の大隈鉄工所で一年間機械工学を勉強し、翌年の昭和19年には、飛行機の部品や、武器のたま作りをしたそうです。そしてしばらく本社にいました。が、武蔵の下谷工場へ、新入実習生新しく工場に働きに來て見習いの人、を指導したり飛行機の部品を作ったりしたまを作ったりしていました。夜

は、あかりをつけているとてきに見つかってばくげきを受けるので、みんな消していたそうです。

そして父は、指導員としてあちこちに送られたりしていましたが、空襲で本社が焼けてしまったので、仕事がなくなりちやうどおぼんだったの、滋賀県のおばさんの所に帰った時、戦争が終ったそうです。

戦争のさい中、父がいちばん悲しかったことは、ばくげきで、かっていたひばりのひなが死んだことや、本やふとんやノートが焼けた時だ、たそうです。ふとんやノートや本が焼けた時は、どうしようと思つてとても悲しか、たそうですが、今、もし私の持ち物が火事で焼けてしまったらほんとうに父のようば気もちになると思います。父は「もう二度と他の人に戦争を経験させたくない」と言っていました。私も「たいに戦争はしたくない」と思いますが、たまをけずっている時、父は「このたまが一人でも多くのてきを殺してほしい」と願ひながら作ったそうです。負ければ国が弱びると教えられ一人でも多くてきを殺せと教えられたなんて今から考えるとおそろしいと思います。戦争をしてまで国を強めることはないのと思いました。

戦争の話

長崎 広島に続いて新潟に原爆が落ちるんだ、たと言うから早く戦争が終わって良かったね。と言って母は話をしてくれました。

新潟県は長岡市だけが戦災都市でその他は全然空襲がなかったと言います。だから食糧も豊富でたまに雑炊やこつまいものはいい、たおかりと食べたけれども白米をたべていたそうです。

戦争が終わる少し前に東京の深川という所の小学生^が町を^かそかいしてきたそうです。

町にあるお寺で分宿して先生が各お寺に二人位いづいていたそうです。そして正月に子どもたちが何人かに分かれて町の家におよばれに来たそうです。

そのあとすぐ大空襲で東京特に深川あたりはひびかったそうです。そのうち戦争が終わって帰る家のある人は帰らない人は町にのこり町の民生委員会の家にや、かいにな。ていたそうです。

ぼくは母の話を聞いて、ぼくは戦争が終わってから生まれてよかったと思いま

した。

また大空襲で父や母を失しなうた人のかゆいそうに思いました。

父から聞く戦争話

父の話では、ぼうさいをさがつたそうです。

村の中心で、くうしゅくけいほうをしようせでみんなにしようせたそうです。
家のまどをくろくまり、くうしゅくけいほうくると電線をいめの
でさがしたりしてくふうしたそうです。

山なし

父の話では、てきど近くの川と、まてまうがえてバクダンをあとしたそ
うです。

八王子のくうしゅくとき、父の家がう山のもこうがま。おにまて、てお
えたそうです。

その日日本のひこうきが近くの山におちたそうです。

かんそう

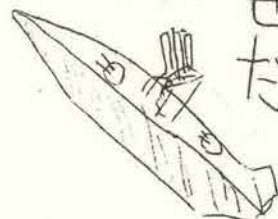
◎もがしの人はいくつかうしたと

思います。

◎せんそうはやだなあ

◎今はナキセだ

と思おう



戦争

昭和20年 8月1日 午後8時ごろ くうしゅうけいほうが

夏の夜に、けたたましく鳴りひびいた。

しかし、そのはやくげ、機はくうしゅうはせず、そのまま
と、り過ぎてい、てしまった。

そこでみんなは、安心して泊ってしまった。

ところが、午前は時ごろ、ふたたびくうしゅうけいほうが

鳴りひびいた。ばやくげ、機は、さ、き8時ごろ、

とあり過ぎていった、はやくげの機だった。ばやくげ、機は、

しょういだんを、落しはじめた。安心していたみんなは、

あどろいてしまった。このとき、一軍だった田は、びくくりしたのが、

一人で家をとびだしてしまった。これを見たおばあちゃん、

やることも、おじいちゃんやみんなにたのんで

田のあとを、追った。くうしゅうで、つぎつぎと人が、

死で、いった。

そのころ、あじうちやんやほかのみんなは、また家でラシオや、たいせきなものや、ぼうこうごうに売っていた。

そして母とあはあちゃんとは、宮森へ逃げ、

あじうちやんやほかのみんなは、現在(いま)の山田の方へ

逃げた。そして、やけあとの家で、雨会した。

ぼくは、この話を聞いて、ぼんとうに戦争というのは、おそろしいものだと思った。

二度と、こんなおそろしいことを、してはいけないと思った。

親の語る戦争

私は父に、戦争の話をききました。

最初は、食べ物のことです。父たちの戦争中の食べ物といったら、今ではとて~~き~~^考えられないものでした。たとえば、さつまいものくさやかぼちゃのたねやいぼごの干した物などを食べていたそうです。きちうんお米は食べられないけど毎日二人は物ばかりでは、あまりにきかぬけうだと思いました。

次は、空しゅうのことです。父は^福井県に住んでいました。福井県の空しゅうは、とてきはげしかったそうで父たちは、すぐ親せきのうちへそかいしたそうです。そかいしたあと家がやけてしまっけかいた親せきのうちに長い間いました。

父は、学ぼうけいではなく、親せきのうちだったからよかったなと思いました。

次は学校のことです。父はそかいしたうちのそばにある学校へかよいました。でキキニは、学校らしい勉強など一つきはないで、戦争のためのく人練などをさせていたそうです。そのく人練というのは、はくだんのなやかたどとか、バラシニートのおり方だとか、てき兵がじゅうをうってきた時、よけるための運動などをしたそうです。その他、食べ物が少なかったので校庭を全部畑にかえてしまいさつまいもやじゃがいもとうえていたそうです。

私は父から戦争の話を、ききました。がこい人にもくるしい物だとは思いませんでした。だからきうぜったい戦争は、したくないと思います。

田親の語る戦争

父の叔父は、千葉県銚子にあり家の上も飛行機が、何機もかすめとんでいったそうです。

ある日、家のそばをガダガダと機じゅうの弾がかすめて、井戸のそばで洗たく物をしていた父の田の足もとに弾の破片が、ゲサッとささり、びりりしたそうです。

また終戦後、船で兵器を沖にすてにいき兵器を収埋するという方法を、国がやっていた、父は、そのすてた兵器の弾丸をとりにいき、パイプをけんじゅうにしカモや鳥をとったとか、手りゅう弾を川や海になげこみ、魚を、たとかいっていた。その後父は、人殺しの道具も、人殺し以外につかえるなあといっていた。

母は戦争中は、八王子に住んでいて、堅しゅうけいほうがなると、ぼうやごうへすうとんでいったそうです。ほっぽうかしていた家は、不思議とやら

此ずにもえずにのこっていたそうだが。

また、これを空しゅうがあつたときの出発事で、母たちは、あゝ川原はいり川のむこうまでいったことがあるそうだが。

二人とも、もう戦事はいやだなあというていました。

よくは、戦争を知らないだけにか、こいとお思ひ、いたけれど、前親の話を聞かぬ戦争はいやだなあをつくづく知らされた。

親の語る戦争

父の家は、群馬県にありました。家の近くには、飛行場があつたそうです。たまたまに、敵の飛行機がその飛行場の飛行機を、こわしにきたそうです。でも夜は、飛行場は電燈をけして、まっくらにしているため、みえないから敵の飛行機は、照明弾を、おとして、昼間のような明るさにして、ばくだんを、おとして飛行機を、こわすのだそうです。照明弾というのは、飛行機がおとすと、もえながら、や、くりおちてくるのだそうです。照明弾がおちてくる間は、すつと、風のような明るさだ、たそうです。

母はあのころ、東京の五反田にすんでいたそうです。空しゅうがはげしくなつたとき、お兄さんと二人で、埼玉県浦和のおじいさんの家にかいしたそうです。でも、友だちとは似ながら、たりしてさびしくなり、家にかえつたそうです。でもそのあと、また空しゅうがはげしくなり、危険になつたので、家族全員でおじいさんの家に、をかいたそうです。家では、光が外へもぬけないように、電氣にふろしきをし、かぶしたり、空しゅうのはげしい時は、洋

腹をきて防くうずきんをかぶって悩たそうです。

戦後、父の家の近くに、しかん学校があつたので、外国の兵隊さんが、たくさんきたやうです。その兵隊さんは皆鉄砲をもつて、口をクチャクチャ動かしつたやうです。父がはじめに外人をみたときは、とてもびっくりしたやうです。背は高く、目は高く、いつもチーインガムをかんでいて、「ハローハロー」といふたからだやうです。

母の学校のおべんとうの時間、町の子は、おべんとうをかぐしてたべたやうです。農家の子は、家でお米がつくぬるのでいつもま、白米お米をたべていたけど町の子は、お米ほどぐんにやいのので、お米の麦に麦、お米などもたべていたからだやうです。

私は、話をきいて、こゆいおもいでしたり、さびしかつたりして苦勞をいたんだなと思ひました。

私は父や母のたいけんの友に、戦争にがんする話をたくさんききました。でも、もう私は、こんな話をききたいとは思ひません。それに、こゆい思いをしたり、友だちとわがたりするやうな、たいけんは、せつたいに、したくないと思ひます。

母が語る戦争

私の母は九人兄弟です。「生めよ増せよ」の戦争中だつたので兄弟が多いのです。生まれたのは岩手県の田園地帯で、終戦間近になると、空しゅうが多くなり防空ごうにけこんださうです。

金物類や指輪などは全部とりあげられて、飛行機に作りかえられてしまつたさうです。

食べ物も不足して毎日ごはんのかわりに、いもやかぼちゃなどを食べ、野菜もないので、さつまいもの葉や、はこべなど、野原などにはえる草までも食べて育つたということでした。

小学校のことは国民学校といい、学校の白いかべは、敵の飛行機から目立つので、目立たないように、すみでまっ黒くぬりつぶしたさうです。母はそれがとても悲しくて、今でもおぼえていると話してくれました。そして当時は勉強などしないで、野原や山を開こんして大豆やいもなど

を植えさせられたそうです。「何が食べたい。」「あれがほしい。」
などと言うと、「ほしがりません。勝つまでは」と教えられる。ぜったいに日本は勝つともんじていたそうです。「兵隊さんはがんばっているんだからこのくらいのこと。」と思い、ボロボロでつぎはぎだらけで、もうつぎはぎをすることがもないほどの服をきていて、とても悲しかったということです。

私は今戦争がおこったら生きてはいけなと思います。あまり物が手にはいりにくか。たまたまの時代でもみんな苦しんだのに、なんでもあって、なんでも食べたいものは食べられるという生活をしている私たちの戦争の中でもいもなごばかり食べてなんて、ぜったいにむりだと思のです。

二度とまたこんなことがおこらないように世界の国々とのことは全部話し合いにしてみたいと思います。

戦争 第二次世界大戦

この戦争が始まった時のことを母から聞きました。母は、群馬の多野郡鬼石町と言う所で生まれました。この鬼石ではあまり被害がなく、こま、たと言うことは、食料と衣服が不足で、こま、たそうです。おばあさんの帯や着物を解き、子供達の防空をきんを作、てくわしたそうです。そして、敵がせめて来た時や、敵の飛行機がせめて来た時は防空号へにげこみ、身をかくしたそうです。それから食料がなくなってしまうと人々で物物こうかんをする。食料の中ではかんづめが多く、あとは、麦、いもなどを食べた。母のいとこが満州で看護婦をしていました。父は秋田市の宮田と言う所で生まれました。この宮田は、大きな被害がありました。ここは、石油が取れるのです。そのため石油に爆弾が、おちてこの近は火の海になりました。それに食料が不足した。いへんこま、たそうです。けれど父の家まわりには、森や畑があったので、リンゴや木の子、などを食料にしました。そして雪が多い秋田などは少し、にけるのにべんりて白い雪は家も地もみな、まっ白にしています。白い色は、白い物さ、と言うことで

下から見ると、雪の色に白い物をかぶれば、見つけられません。だから、つこうがよいのです。こうして身を隠したそうです。戦争はおそろしいので、もうしたくありません。今は食べる物もあり、ぜいたくができるので、とても、幸せです。

父母の語る戦争

戦争中、父と母は、二人とも、そかいしていました。

父は、京東から長野へ、母は、川崎から、同じ、神奈川県の大山へ、

父は一家で母は、集団そかいで、そかいしていました。

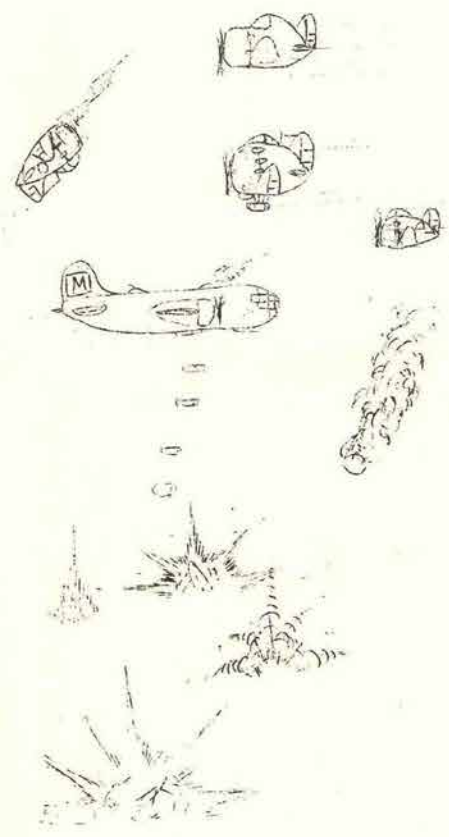
食べていたものは、いも、すいとん、カボチャをむしたもの、などだやうです。ぼくだ、たら、すいとんなんかない日たべていたらあきちゃうなと思います。それに、母の方の話ですが、昼間、山で山菜などをとってきい、それをおみそしるに入れてもらってたべたそうで、食べられる草をとってこなか、たら、野菜なしだそうでした。

戦争中、母は、いまでいう発明くふうコンクールみたいなものに、作品を出して、賞じょうをもら、たそうで、それは、半分にわ、た竹をかみあわせて、つないだ、カーテンのような物だそうです。これだと、竹

がかみあうようなか、つうのものなので、光がもれないやうです。

父が東京に帰って、もといた学校(三)の学校は、この時代にはめずらしく、プールなどもある、たそうだった、てみると、たて物は、これされて

プールだけへこんでいたそうです。
 こういうふうには、たて物は、メチャクチャになるし、人は死ぬし、食
 ばもののなくなる、戦争はおこさないようにしようと思ひます。
 しかし、いま戦争がおこったら、このくらいでは、すまされなくてしょう。



大東亞戦争の経過

昭和十六年十二月十四日その日は
 朝礼がないはずなのに朝礼をして校
 長先生が、けさ日本は、アメリカや
 イギリスにたいせんせんをふこく
 し、日本海軍は、太平洋において
 戦争をはじめた。そして真珠湾をこ
 うけ、アメリカ太平洋艦隊をけ
 めつする、そして、

「ほしがりません勝つまであ
 と」全校生徒で叫んだそうです。
 昭和十七年そのころ陸軍はしな
 (今の中国)で戦、上海南京をせん
 り、うし、シンガポールのを、開港ちよ

ろんぎやうなつや花電車をはしうして
 おいおいをする。王子のあすか山へ、
 見にい、た。

そのころが、鉄や鋼で作られたなへ
 らがまは、供出させられる。となり
 組で防火訓練をはじめ、
 うちが兵隊たちのふくを作る人だち
 のしぐしにな、ていて、ほくたうか
 うの、おはあさんは、その人たちの
 食事を作、こいたそうです。

昭和十七年三月、日本にはじめて、
 空しゅうをうけた。その飛んできた、
 飛行機の中の一機が近こわ小學校の屋
 根をれすれにとんで荒川工兵隊の大館
 までの飛行機をうちおとした。

（川口）に飛行機はつい落ち、飛行士は還少年航空隊に志願し出征する。
その人たちがやりやうとあてついで殺
した。

八月に静岡の沼津にこゝ

空校でも竹やりで銃や剣術の練習を
はじめた。

九月に日清線が東海道に架設してこ
た。

昭和十九年防空士さんが出たそう
だ。

兵隊が駐屯して教室にのりかほ。せ
りしてこゝろ。たっし。

空襲がはじまると、校庭もさうまい
も畑に変わってしまった。たしおきの
鐘や水では、見えなかつた。林の中
のり松の
木の下から空が見えるようになった。
六年生や高井村の上級生たちは海軍
潜水空母艦隊のしりげとて飛来を受

けた。

静岡沼津が戦場をうけるその時にた
そうた

原の三本松に、あめ工場はさつまいも
がうでんぶんをとつて、あめを作。て
発表がある。とゆうのでニがいにい。
いた。その工場は完全小学校ぐら
いりて聞いてる。最中おはあちゃん
がしんだ
大きさをたそうた。その工場にし
ようだ。戦争がおあつたのにさう式
のいんが熱された。そのしゅうい
だ。最中に空しゅうけいはうがな
て、お
んが、かたづけられるとさしゅう
いだ。さうしさをほ、ぼらがして
ぼうく、こ
んのり。うがトラウリ五分分あ、
たさうへはいつたそうた
うだ。

昭和二十年八月かんさい機が空
じゅう
うに来るようになった。

走、ている汽車めがけてきかんじ
う
をうたれて汽車があなだらけにな
た
おとうさんが横型飛行機をかいに

学校でもはじめのうちは警本警報
室へ呼して、たが、したいにはけし
なりしよい。航空警報でなければ
してくれなくな、たさうんぼくは
をさいてひどい、さうだんと思、
た
計しはつづいて

松林の中を通、こ家へえ、たり
時には松林の中で勉強をしたさう
た。

太い松の木は、その木から油をと
た。その油で飛行機をとほすんた
から、

たいしたもんた。さうに日本がま
けるはずかなと思、た。そのため
えま
木の下から空が見えるようになった。
六年生や高井村の上級生たちは海軍
潜水空母艦隊のしりげとて飛来を受

くところ、横をさかんじゅうでうた
れ

昭和二十五年八月十五日うツオで
重
発表がある。とゆうのでニがいにい。
いた。その工場は完全小学校ぐら
いりて聞いてる。最中おはあちゃん
がしんだ
大きさをたそうた。その工場にし
ようだ。戦争がおあつたのにさう式
のいんが熱された。そのしゅうい
だ。最中に空しゅうけいはうがな
て、お
んが、かたづけられるとさしゅう
いだ。さうしさをほ、ぼらがして
ぼうく、こ
んのり。うがトラウリ五分分あ、
たさうへはいつたそうた
うだ。

ぼくは、戦争は二度とやりたくない
と思、た